

2026年度 SYLLABUS 【博士後期課程】

授業科目名	総合演習V「組織の本質と現実」		
担当教員名	藤沼 司、紫関 正博		
ディプロマ・ポリシー (DP) との関係			
	DP1	DP2	DP3
	○	○	○
科 目 の テ ー マ	<p>本演習は、「企業を含めた組織の本質と現実」を、アメリカ経営学およびドイツ経営学（経営経済学）の観点から、複眼的に問う。</p> <p>組織は「協働 co-operation」過程で成立してくるので、「協働とは何か」と問うところから始める。「協働」はこんにち様々なところで使用されるフレーズである。近年では、複雑な社会課題は特定組織（企業、行政、NPO など）単独では解決できず、多様な組織が効果的に協働する仕組み（クロスセクター協働、マルチステークホルダー・パートナーシップ、多職種協働など）が求められている。多様な組織間の効果的協働を確保するためにどのような条件が必要かが議論されている。その中に例えば、共通アジェンダの共有、コミュニケーションの確保、共通の評価・測定システムの構築などが挙げられる。こうした点を、アメリカ経営学の観点から議論していく。</p> <p>続いて、企業（組織）を、ドイツ経営学（経営経済学）の歴史から、複眼的に問う。古川（1977）によれば、ドイツの経営学は、20世紀に入ると、企業に投下された固定資本の運営と、それに伴う経営費用の問題についての科学的研究を中心に発展してきた。また、ドイツでは、経営学の研究内容は、会計学的研究と一体となって、進展するにいたったといわれている（古川栄一（1977）『経営学通論』、同文館、三訂64版、22頁）。こうした点に鑑み、ドイツ経営学（経営経済学）における会計研究の側面から議論をしていく。テーマとして、ドイツの経営経済学における原価概念を取り上げる。それにより、原価理論を基礎にした企業の経営費用の管理に関する検討を通じて、会計の本質とともに、会計と企業（組織）の関係を見据え、企業（組織）の本質と現実を追求する。</p>		
科 目 内 容 ・ 方 法 等	<p>本科目では、第1回に担当教員2名と履修者全員が集まり、この演習に対する取り組み方について説明する。その後、第2回～第8回は藤沼（アメリカ経営学）が、第9回～第15回は紫関（ドイツ経営学）がそれぞれ担当する。</p> <p>本演習は、履修者が毎回輪読文献あるいは関連文献を読み解き、担当教員と議論するという方法で行われる。授業の最後に、自身の研究テーマと関連づけたレポートを作成してもらう（藤沼）。また、企業（組織）の経営管理上の問題に基づいたレポートを作成してもらう（紫関）。</p> <p>以下の輪読文献あるいは関連文献の中から、学生と話し合った上で、文献（場合によっては、その一部分）を選定して読み、文献を吟味する。</p>		

科目 内容 方法 等	<p>【輪読文献】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Chester I. Barnard (1938), <i>The Functions of the Executive</i>, Harvard University Press. ・ 藤沼 司 (2015) 『経営学と文明の転換—知識経営論の系譜とその批判的研究—』 文眞堂。 ・ 村田晴夫 (1984) 『管理の哲学』 文眞堂。 ・ 小笠原英司・藤沼司編著 (2016) 『原子力発電企業と事業経営—東日本大震災と福島原発事故から学ぶ—』 文眞堂。 ・ 川口八洲雄 (1980) 『原価理論』 森山書店。 ・ 松本 剛 (1967) 『原価理論の構造』 森山書店。 ・ 神戸大学会計学研究会編 (1954) 『シュマーレンバッハ研究』 中央経済社。 ・ 溝口一雄・森 昭夫・小野二郎訳 (1977) 『経営経済学原理』 第3巻 財務論、千倉書房。
	<p>到達目標：</p> <p>(藤沼)：「協働とは何か」について基本的なところから問い、その「協働」観を踏まえて、履修者自身の研究テーマに即した論文執筆の基礎を確立することを目標とする。</p> <p>(紫関)：会計（とりわけ原価計算）の視点から、原価理論を基礎にした企業の経営費用の管理に関する考察を通じて、更なる企業（組織）の経営管理上の問題を習得することを目標とする。</p>
	<p>評価方法及び評価基準：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 受講時の態度（積極性の有無）や発言内容（質問、意見等）、レポート等によって総合的に評価する。 ・ 成績評価は、60点未満をF、60～69点をC、70～79点をB、80点以上をAとする4段階とし、C以上の評価に単位を与える。 ・ 各評価の基準は以下の通り。 <ul style="list-style-type: none"> A評価：授業内容を応用できるのみならず、批判的にとらえることを含めて、当該理解をさらに発展させられること。 B評価：授業内容の理解に基づいて、より広いケースにその理解を応用できること。 C評価：授業内容について、概ね理解していること。
	<p>授業の方法：</p> <p>授業は、輪読文献あるいは関連文献について、履修者に読み解いた内容を報告してもらい、議論する形式で進める。</p>